

アメリカ軍が中米のグレナダに侵攻し、世界が騒然としていた、一九八三年（昭和五十八年）十月末のことである。

「くに改ま国東にかかわることが出てきそうなんだけど、出そうで出ないのね。仕事をし  
ていて苦しくて」

求道の同伴者である白山里子がそう言うので、大国光道は彼女を神前に誘つてウケに入った。東京小平市の閑静な一角にある、四世帯入るアパートの、二階の部屋での出来事であった。このとき大国光道はちょうど四十才、妻とも愛人とも言えない同行の女道人、シャーマンとしての資質にすぐれた白山里子は、三十二才の遅咲きの女盛りであった。

国東に神あれませる

カシキヒメにてありませる

天変地変の狂乱を

かなでて指揮するカシキヒメ

「やっぱりそうだったのか」光道は、喜びと緊張の入り混じった複雑な思いにと  
らわれながら、紙に書き移された神の「おことば」を、何度も何度も読み返した。

アメリカ軍がグレナダに侵入したことは、ソ連のアフガニスタン侵攻となんら変ることのない侵略行為である、と世界の世論が沸騰しているころ、光道は、アメリカを守護しているのはカシキヒメではあるまいか、という思いにとらわれ始めていた。その矢先の「おことは」であつたがゆえに、なおさら感銘が深かつたのである。

日本神道を通して神への道を求めていた大國光道は、十年ほども続けてきた滝の行に区切りをつけて、各地の山々を巡ることには修行の課題を置いていた。そしてその資金かせぎのために、ある病院で警備のアルバイトをしながら、春になつたら再度出かける予定を組んでいた、九州の山々のことに思いをはせていた。特に、カシキヒメを受けて立つ少女に、今度は会おうと決心していた光道は、その方策をあれこれ探していたところだつたのである。

以下略